

長久手町史編さん委員会  
文化財調査報告 No. 1

愛知県長久手町

# 大草城跡地形測量等調査報告書

1987 長久手町

## 序

長久手町は、名古屋市の東隣に位置する、都市型住宅地と田園とがうまく調和する町です。

大草城跡は町域東北部、近世大草村のほぼ中央部に、丘陵尾根の末端を切り取ったような形で所在します。

かつて、長久手町域には大草城のほかに岩作東城、同西城、長久手城、福岡太郎右衛門（一説に太郎左衛門、太郎助とも）館などの中世城館があったと伝えられています。

しかし、それらの城館跡も、現代の急激な変容の中で、多くが失われてしまいました。町の開発と、自然や文化財の保護、調和は、多くの場合二律背反し、非常な難しさを伴います。

幸い、大草城跡は大きな外力を加えられることなく戦前、戦後を過ぎ、今日に至っています。しかしながら、大草城跡に関する文献や史料は乏しく、成立や廃城の時代すら知られていませんが、地域の人々に深く、長く語り継がれた城跡地にまつわる話が、いくつか伝わります。

本調査は、その話に端を発し、現地の現況地形測量に基づく遺構確認を実施し、文献や史料の整理を試みました。

本調査が、本町域の史的解明に一光を点し、郷土愛や誇り、理解につながることを祈念します。

調査の折、格別のご指導、ご協力を賜りました名古屋大学の檜崎彰一氏、愛知県陶磁資料館の柴垣勇夫氏、愛知県教育委員会文化財課の赤羽一郎氏、名古屋市見晴台考古資料館の千田嘉博氏、並びに、地元の方々、関係各位に深く謝意を表します。

昭和62年3月

長久手町長 山 田 市 造

# 例 言

1. 本書は、愛知県愛知郡長久手町大字熊張字郷前，字杖之洞，字北浦，字溝之杖に所在する大草城跡総構え約66,000㎡の内，中心域約25,000㎡の現況地形測量調査並びに，文献資料等調査の報告書である。
2. 調査は，大草城に関する文献や伝説を基に，予め調査範囲を定めて現況の地形測量を行い，遺構の測量，範囲の確認を図ると共に，文献や史料等に散見される資料を整理し，大草城に関する学術調査の端緒として実施した。
3. 調査は，愛知県地方振興補助事業として，長久手町史編さん委員会が1987年1月から同年3月までに実施した。
4. 調査は，下記の構成で実施した。

調査団長	山田市造（長久手町史編さん委員長）
調査団理事	青山清治，伊藤一一，加納秀夫，川本勝美，川本金利，近藤光照，柴田義雄，鍋島文知，林董一，林藤三，三岡太（以上長久手町史編さん委員）
調査指導	檜崎彰一（名古屋大学教授）
調査補助員	丹羽誠次郎，速水敦（以上愛知県立芸術大学学生）
協力者	長久手町大字熊張西区（大草），土地所有者
事務局	加藤孝雄，山田幸弘，加藤八州夫，鈴木孝美，伊藤祥子（以上長久手町史編さん事務局）
5. 地形測量は，調査指導者の指示のもと，株式会社信和エンジニアリングが担当した。
6. 本書の執筆は下記により行い，檜崎彰一が監修した。

第1章	伊藤祥子	第2・3章	檜崎彰一
-----	------	-------	------
7. 本調査並びに本書作成過程で，下記の方々のご指導，ご協力を得た。ここに記し，深く感謝の意を表します。

柴垣勇夫	愛知県陶磁資料館学芸課長
赤羽一郎	愛知県教育委員会文化財課主事
千田嘉博	名古屋市見晴台考古資料館学芸員

# 本文目次

序	
例言	
第1章 遺跡の所在位置と歴史的環境	1
第1節 遺跡の所在地	1
第2節 遺跡の歴史的環境	1
1. 近世初期の大草村	1
2. 大草城跡周辺の遺跡と遺物	2
3. 権道寺遺聞	3
4. 長久手合戦と大草城	4
5. 近世記録における大草城の抹消	5
第2章 大草城跡の現況	7
第1節 大草城の位置	7
第2節 大草城の諸郭の配置	7
1. 主郭	8
2. 東郭	8
3. 主郭西部の土塁と帯曲輪	9
4. 虎口の構造	9
5. 西南郭	10
6. 東南郭	10
7. その他の遺構	11
第3章 結語	12
第1節 遺構からみた大草城	12
第2節 歴史的にみた大草城	12
文献資料	15
図版	31

## 文 献 一 覧

文献資料 1	『尾張志』抄……………	16
文献資料 2	「尾張国愛知郡熊張村誌」抄 明治13年……………	16
文献資料 3	『愛知郡誌』抄 明治22年……………	16
文献資料 4	『愛知郡誌』抄 大正11年……………	16
文献資料 5	『長久手村誌』抄 昭和11年……………	16
文献資料 6	『長久手村誌』抄 昭和42年……………	17
文献資料 7	稿本「大草村誌」 ～昭和5年……………	17
	五. 土地に関する事項之部	
	• 地図之部   • 山林之部……………	17
文献資料 8	「大草村誌」	
	八. 古跡   • 城下の古塚……………	18
文献資料 9	「大草村誌」	
	八. 古跡   • 権道寺の跡……………	18
文献資料10	「大草村誌」	
	十二. 伝説抄……………	19
文献資料11	「大草村誌」	
	八. 古跡   • 大草城趾……………	19
文献資料12	「大草村誌」	
	十二. 伝説抄……………	20
	長久手合戦の略記	
	—旧大草村地内の話—……………	20
文献資料13	「長久手村合戦場伝之記」抄 享保4年(1719)……	22
文献資料14	「長久手記」抄 享保21年(1736)……………	22
文献資料15	「参考長久手記 上」抄 ～寛政9年(1797)……	22
文献資料16	「長久手合戦記」抄 天明4年(1784)……………	23
文献資料17	「参考長久手記 中」抄 ～寛政9年(1797)……	24

文献資料18	「永見寺由来記」抄 文政12年(1829)永見寺……………	24
文献資料19	「長久手軍記」抄 承応2年(1653)……………	25
文献資料20	「由緒書」抄 安政6年(1859)教圓寺……………	26
文献資料21	「公録諸願達留扣簿」抄 御達申上候事 明治3年 前熊寺……………	26
文献資料22	「前熊寺鎮守天王由緒書」抄 奉願上候事 明治3年 前熊寺……………	27
文献資料23	「上地届」 明治9年 前熊寺……………	28
文献資料24	「大草庵創建棟札」 天正13年(1585)永見寺……………	29

## 図 版 一 覧

図 1	長久手町位置図	32
図 2	長久手町域遺跡分布図	33
図 3	遺跡案内図	35
図 4	遺跡位置図	36
図 5	遺跡の推定範囲と第一次測量調査域	37
図 6	地元古老の記憶図	38
図 7	現況地形測量図	39
図 8	大草城縄張図	41
写真 1	航空写真 1964. 3. 22写	43
写真 2	城跡遠望 南方前熊集落から望む	45
写真 3	城跡の全貌 1 東方三光院の丘上から見る	45
写真 4	城跡の全貌 2 北方北浦集落山上から見る	47
写真 5	城跡の全貌 3 西方山上から見る	47
写真 6	主郭の全貌 1 西側土塁の北肩から見る	49
写真 7	主郭の全貌 2 東郭の南肩から見る	49
写真 8	主郭北側の土塁	51
写真 9	主郭北側土塁切通し部分の痕跡	51
写真 10	主郭西腰曲輪中央の折れ 1 東から見る	53
写真 11	主郭西腰曲輪中央の折れ 2 南から見る	53
写真 12	東郭上部から北方を見る	55
写真 13	東南郭を南から見る	55
写真 14	大手から主郭を見る	57
写真 15	大手曲輪西北部	57
写真 16	大手虎口	59

写真17	旧大手虎口	59
写真18	大手土塁 1	61
写真19	大手土塁 2	61
写真20	西南郭 1	63
写真21	西南郭 2	63
写真22	東の大堀切 1 北から南を見下ろす	65
写真23	東の大堀切 2 東の墓地から見る	65
写真24	井戸 (大)	67
写真25	井戸 (小)	67
写真26	熊野社東部竪堀	69
写真27	熊野社東部小竪堀	69
写真28	東南部曲輪群を東方鈴木墓から見る	71
写真29	鈴木墓を西方永見寺から見る	71



# 第1章 遺跡の所在位置と歴史的環境

## 第1節 遺跡の所在地

大草城跡は愛知県愛知郡長久手町大字熊張字郷前，字杖ノ洞，字北浦，字溝ノ杵地内約66,000㎡にかかって所在する。

付近は，三河部の猿投山塊が，尾張部の平地へ埋没しようとする低丘陵地帯であり，町域南部の三ヶ峯丘陵に源流をもつ香流川が，丘陵麓に広い沖積平野を形成しながら西流する。

本城跡は，町域北部丘陵から派生する，標高90～120mの数条の鶏足尾根の一つの末端を切り取った丘上にあり，その南垂れの斜面に字郷前の集落，熊野社，曹洞宗永見寺を擁する。概ね大草の集落は，丘陵尾根先端の南垂れ斜面に，ひな壇状にあり，集落南面の道路に沿って東西に並んでいる。集落の南約250mを香流川が西流，流域には水田が連なり，その水田の南縁に大字前熊の集落が細長く連なる。城跡の西と東は谷を成しており，谷筋に開かれた水田を挟んで，他の丘陵尾根と対峙する。北は北東方向に尾根が続いており，その丘陵づたいに瀬戸市菱野町境に達する。なお，城跡のトップレベルから，北方を除く三方の水田や集落との比高は，約30mを測る。

現在，城跡の西約200mを主要地方道瀬戸大府東海線と，その支線の町道北新田線が南走し，本地域を瀬戸市をはじめ，大字岩作，大字前熊，愛知郡日進町と結ぶほか，大草の集落の南縁を縫って大字熊張北熊地区，更に三河部の豊田市北部と結んでいる。また，名古屋市を起点とする県道田名古屋線は，大草の集落の南約500mを，香流川の遡行に沿って南下し，これもやはり豊田市へ抜ける。昭和40年代に新設開通した猿投グリーンロードは，城跡の南約1,000mを東西に走っており，東名高速道路名古屋インターチェンジ及び地下鉄藤ヶ丘駅は，共に城跡の南西約4,000mの位置にある。

城跡の一带を含む町域東部は，現在市街化調整区域となっており，昨今の変容の著しい長久手町にあって，なお多くの自然を留めている。大草城のある丘陵は山林と畑で，近年は放置畑が広がったものの，戦前と大きくは変わらないし，集落もかつての姿をよく留めている。

## 第2節 遺跡の歴史的環境

### 1. 近世初期の大草村

大草城跡は，近世大草村のほぼ中央に位置する。大草村は尾張国，山田庄に属し，北は

本地村，菱野村（以上現瀬戸市），東は北熊村，西は岩作村，南は前熊村（以上現長久手町）に接する。寛文年間の概高は338石7斗余，家数19軒，人数127人，馬11疋。地内に禅宗白坂雲興寺末寺水福山永見寺，高田宗愛知郡山口村本泉寺末寺豊春坊，観音堂名古屋光明院袈裟下山伏掌三光坊，熱田祢宜掌八幡社，三光坊掌山神社があった。<sup>註1</sup>この頃，大草城ないし大草城跡が，どのような状況であったか，それに関する記録はない。

これ以前の大草城について言及する文献はほとんど見えず，地内あるいは近隣地域に所在する遺跡や遺物から，それを類推するほかはない。

## 2. 大草城跡周辺の遺跡と遺物

大草城跡周辺の遺跡や遺物は，概ね古墳時代以降のもので，それらは香流川が貫流する平地部を取り囲むようにある丘陵の斜面に点在する。

東隣の北熊の集落に近い字助六<sup>すけろく</sup>や字神門<sup>とりのいま</sup>前の丘陵内に，助六古墳群，神明社古墳群と呼ばれる墳径10～20mの，横穴式石室をもつ円墳が7基，その古墳群と香流川を挟んで対峙する，前熊の集落はずれの丘陵に2基，また城跡の南西約1,000mに望見できる岩作丘陵高根山上に1基の同様の古墳がある。これらの成立年代は，過去に発掘調査された助六第1号墳や，神明社第2号墳の出土遺物の須恵器や鉄鏃などから，6～7Cにかかるものと推定されている。

生産遺跡は，城跡北約500mの杵ノ洞<sup>いりのほらかいけ</sup>上池畔に，山茶碗を生産した杵ノ洞第1号窯，同じく東約1,000mの丘陵内にも山茶碗を焼いた福井第1号窯がある。そして，福井より更に東約500mに茨ヶ廻間<sup>いばらがほさま</sup>第1号窯がある。本窯は昭和56年1月に発掘調査されており，瓦と瀬戸系山茶碗をセットにして生産した13Cの窯であったことが明らかにされた。ほかにも，城跡の南方約2,000mの三ヶ峯丘陵内には，多くの窯業生産跡が存在し，現在までに須恵器窯，山茶碗窯10数基が確認されている。

古墳時代以前の遺跡については知られるものはなく，僅かに岩作地内<sup>うちまんなば</sup>宇内万場，同宇高山の丘陵畑に，石鏃，石匕などの石器のほか，夥しい石器の剝片が混在するものの，集落跡や生産跡あるいは工房跡等は確認されていない。

中世末期にかかる遺跡や遺物を拾えば，城跡の東南約600mの，前熊地内の香流川左岸に，福岡太郎右衛門（他説に太郎左衛門，太郎助）館跡がある。ここは現在，前熊寺及びその境内地であり，同寺には天正7年(1579)，時の岐阜県兼山城主森長可が検地し，境内5反歩を除地した記録<sup>註2</sup>が残るほか，星崎城主の男岡田将監の証文等がかつて存在したことを語る記録<sup>註3</sup>も見える。因みに森長可，岡田将監は共に天正12年小牧長久手の戦いに参加して秀

吉に与し、うち、長可は長久手村地内で戦死した武将である。

また、城跡の南西方約1,500mに岩作東城跡がある。これは小牧長久手の戦いで、家康麾下丹羽氏次の居城岩崎城で戦死した今井四郎三郎の城と考えられるもので、昭和60年の発掘調査の結果、南北朝時代の成立、江戸時代初期の廃棄と推定されている。この城の西約600mには、鈴村権八の居城の岩作西城があったと文献は伝えるが、その跡地、人物ともに詳らかでない。

さらに、大草城跡の西南約2,500mに、同じく岩崎城で戦死した丹羽氏次の姉婿加藤太郎右衛門の居城長久手城があったが、寛文年間以前に廃棄された。

大草地区内の城跡東300mの三光院の境内には、応永、宝徳、応仁の年号を刻む、同院代々の法印の墓石が並び、現在の大草の集落が、この時代にまで遡ることを物語る。

### 3. 権道寺遺聞

大草地区を含む近隣地域に、今も根強く行われる権道寺遺聞は、近世以前の大草城ないし大草村を考える上に参考となろう。即ち、かつて大草村に権道寺という寺があり、いつの頃にか焼失し、寺仏の多くは近隣諸寺に安置されたという。その一は永見寺(大草地区)本尊の地藏菩薩立像、一は昌隆寺(前熊地区)本尊の釈迦如来坐像、一は宗延寺(北熊地区)の大日如来坐像。3軀はいずれも現存しており、平安時代の特徴を留めた木造仏であるが、室町時代初期の造像と見做されている。なお、権道寺の鐘が名古屋市熱田の白鳥山法持寺に伝わると記録するほか、教圓寺(岩作地区)の由緒書にも、権道寺との因縁が説かれており、かつて権道寺が近隣諸村に大きな影響力を有していたことがわかる。権道寺の成立、所在地、焼失の時期等について明記する文献はないが、現在、大草地区内の城跡北300mにある、字北浦の集落は権道寺と通称されているほか、その集落から西方の岩作に伸びる立花古道は権道寺街道、その東付きの山、あるいは北付きの山は権道寺山と呼ばれている。

権道寺の所在地がどこであったのか確かではないが、権道寺集落南の深田からは、須恵器片、山茶碗片、土師器片に混って、僅かながら古代瓦片も採集されている。

権道寺を古代の成立と見るのはあまりに早計であるが、大草地区に西隣する岩作地区の石作神社は承和元年(834)創建で、尾張氏の一族、石作連にかかわる祠、同じく長湫地区の景行天皇社も同4年(837)の創建と伝えることを考え合わせれば、古代から付近に在地の勢力があり、窳業活動を伴いつつ、経済伸長を図り、中世期の集落形成、あるいはまた勢力拡張に大きく寄与したであろうことが考えられる。

#### 4. 長久手合戦と大草城

中世末期の天正12年(1584)、折から信長没後の権力奪取の抗争で、秀吉と家康に間隙が生じ、小牧長久手の役へと発展した。その一連の抗争中、最も激しい戦闘となった長久手合戦の戦場は、大草城跡から約2,500m西南域に広がる。その折、岡崎に進軍した秀吉方の軍を、小牧山から追尾した家康は、小幡（現名古屋守山区）から印場（現尾張旭市）に達し、本地（現瀬戸市）を経て大草に入り、地内権道寺、<sup>註13</sup>市坂<sup>いちざか</sup>を<sup>註14</sup>通<sup>ぬ</sup>って岩作に、そして長久手の戦場に進軍した。激しい戦闘の末、家康は勝利し、小幡に帰城した。敗れた秀吉方の諸軍は、多くは高針、藤森方面から名古屋方面に、あるいは大草あたりから猿投の山中に逃れた。この敗走の折、秀吉方の武将池田恒興の二男三左衛門輝政に係る記述が目を引く。即ち、輝政は、父と兄元助の敗走（実は戦死）を知らされ、大草村に退いた後、尼ヶ崎に帰城したという。村を城に読み換えて記述を追うならば、大草城に関する僅かではあるが、新しい情報となろう。類する記述は、長久手合戦記の写本に時折散見できるが、輝政の動向に係る記述は少なく、しかもこの大草村の場所の規定も諸説あって確定的でない。

大草村と秀吉方の敗残兵を結びつけるもう一つの記録がある。それは、敗戦後、池田軍の侍大将の伊藤三右衛門友信、鈴木武兵衛通宣、中野傳之丞等が大草村に落ちのび、草原を耕し、山林を伐り開いて農耕に精励したと伝える。<sup>註15</sup>そして、翌天正13年には彼らが発願し、時の地頭職福岡氏に請願の上、大草庵（後の永見寺）一字を建立した。<sup>註16</sup>このことは、合戦の当時、大草村ないし大草城主が池田方、ひいては秀吉方に与し、決して敵対する関係ではなかったことを物語ってはいないだろうか。大草村の北隣の菱野村では、梶田甚五郎神社の社伝にみるように、秀吉方の敗残兵が郷民の落武者狩りに遭って落命した。<sup>註17</sup>菱野村に限らず、戦後、家康の敗残兵の詮議は厳しく、戦場から北、小牧へ至る尾張部一帯の平地は、秀吉諸軍の敗残兵にとっては鬼門であり、生命の保障のない地であった。そんな折、大草村において、池田軍の将兵が帰農した事実は特筆に値するものであろう。

先述の池田三左衛門輝政の合戦時の行動や池田軍の猿投山中への敗走、池田方将兵の大草村帰農等を考え合わせてみれば、この時、大草城ないし大草城主は、少なくともこの合戦に関係しており、しかもその城主は間接的には秀吉麾下であったと考えることはできないだろうか。

しかしながら、過去の記録を見れば、この抗争中、旗色を明らかにして登場する前述の岩作東城、長久手城、岩崎城等の存在に係る情報量に対して、大草城ないし大草城主に関するそれは極めて乏しい。家康の進軍路であり、かつ秀吉方諸軍の敗走路の起点になったにもかかわらずである。

## 5. 近世記録における大草城の抹消

以後、大草城は記録に名を留めず、『寛文村々覚書』、『張州府志』、『尾張徇行記』等の公的地誌にも記述されない。尾張藩の記録の中に大草城を見出すのは、天保期(1830~44)成立の『尾張志』まで待たなければならない。その記述によれば、城主は福岡新助、城内は東西20間、南北20間とある。

そして、維新以後は、大草城の記録は、まるで市民権でも得たように、一般に公開されることになる。明治13年編集の「尾張国愛知郡熊張村誌」を皮切りに、次々と編纂された県史、郡誌等、公的機関の手になる村勢一覧や地誌等に、大草城に関する記述のないものはない。これらに見る記述の内容は、概ね『尾張志』のそれに準じたもの、ないしそれを補足する旨の内容であるが、その都度地元取材して叙述したらしく、大草城跡界内数値に多少の差異がみられる。

いずれにしろ、維新後の大草城の記録公開をみると、大草城が、維新後の村勢一覧や地誌の編纂から外すことができない項目であったことがわかる。では、なぜ『尾張志』以前の近世の同種の記録に、それを見出すことができないのであろうか。

理由として、二つのことが考えられよう。

その一は、長久手合戦記等に多出する大草村ないし大草城は、同名の二か所の大草村ないし大草城が混記されたため混乱し、時間の経過と共にその内の一か所の大草村ないし大草城の意が全く脱落し、解されなくなった。即ち、合戦当時の篠木柏井庄大草村大草砦(現小牧市)であり、山田庄大草村大草城(現長久手町)である。言うまでもなくこの二者の内、諸記録中で生き残ったのは前者であり、死滅したのは後者である。

その二は、時の権力が極めて作為的に、山田庄大草村大草城を記録から抹消したことが考えられる。つまり、山田庄大草村の大草城が、近世の為政者にとって目障りな旧勢力の所産であって、しかも旧権力の力の誇示ないし、その維持に大きく貢献した存在であった場合、現勢力がそれを、徹底的に破壊し、その存在を無視ないし否定するのは当然のことであつたらう。新権力が誕生する場合、旧権力を否定し、その遺産を破壊することによって、新権力、新秩序の樹立を図り、新体制の確立に努める例は、洋の東西、古今を問わず、多く知られるところである。

近世に入り、家康が旧勢力一掃のため、徹底した秀吉おろしを実行し、秀吉建立の社寺仏閣の破壊はおろか、秀吉墓の毀損、秀吉恩顧の諸大名家の改易、取り潰し、秀吉血縁者の殺戮までやっていたのは、夙に知られた史実である。

- 註1 『寛文村々覚書』のうち、山田之庄大草村の項
- 註2 「公録諸願達留扣簿」慶応4年(1868), 前熊寺蔵のうち「御達申上候事」  
「前熊寺鎮守天王由緒書」明治3年, 前熊寺蔵のうち「奉願上候事」  
「上地届」明治9年, 前熊寺蔵
- 註3 「前熊寺鎮守天王由緒書」明治3年, 前熊寺蔵のうち「奉願上候事」
- 註4 『岩作城第1・2・3次発掘調査報告書』昭和61年 岩作城発掘調査会編
- 註5 『岩作里誌』大正13年, 浅井菊寿著のうち 第十編社寺の項
- 註6 『寛文村々覚書』のうち 山田之庄長久手村の項
- 註7, 8 「大草村誌」～昭和5年, 戸田鉄四郎著のうち 八. 古跡の項
- 註9 「由緒書」安政3年, 教園寺蔵
- 註10 「大草村誌」～昭和5年, 戸田鉄四郎著のうち 五. 土地ニ関スル事項之部の項,  
山林の部. 「参考長久手記」天明2年(1782)～寛政5年(1793), 稲葉通邦註釈, 蓬  
左文庫蔵.
- 註11 石作神社社伝
- 註12 景行天皇社社伝
- 註13 「参考長久手記」前出  
「長久手記」享保21年(1736)書写, 蓬左文庫蔵  
「長久手村合戦場伝之記」享保4年(1719)児氏重書写, 蓬左文庫蔵
- 註14 「長久手合戦記」松平君山書 天明4年(1784)毅亭児島書写, 蓬左文庫蔵
- 註15 「永見寺由来記」文政12年(1829), 永見寺蔵
- 註16 「祀奉請大草」大草庵建立棟札 天正13年(1585), 永見寺蔵
- 註17 梶田甚五郎神社社伝

## 第2章 大草城跡の現況

### 第1節 大草城の位置

大草城は長久手町と瀬戸市菱野地区との境をなす本地川の上流域南部の、標高120m前後の丘陵から南西に延びる支丘の末端を利用して築造されている。その位置についてはすでに第1章で述べられているが、いまいし仔細に見てみよう。

この丘陵端部は、通称「鴻の巣」と呼ばれる標高110mの丘陵がやや細く南西に降ったのち、西方と南方に大きく拡がっていて、北方の溝之杵池から東々南に入り込む谷、通称「ワナツボ」から「チチカラ」、あるいは「チンチンカラ」にかけての入りこみと、永見寺の東部から北方に入り込む谷を結ぶ鞍部によって区切られた250m四方の方形に近い、南西方向に通減しつつ延びる丘陵地形をなしている。この丘陵は東西が高く、中央南半がやや低く凹んだ浅い谷地形をなしている。東西の高所は東の方が高くなっていて、標高103.73mを測る。丘陵南部の郷前の集落内を東西に走る道路面からの比高は28.5mある。大草城はこの丘陵全体を利用して築かれている。

### 第2節 大草城の諸郭の配置

まず、永見寺の東側の谷と「チチカラ」とを結ぶ「鴻の巣」との鞍部から墓地を隔てて、40m西から、南方の大草東児童遊園の東端に向けて、東南々の方向に幅12mの大堀切を設けて東限を画している。

各曲輪は東部の最高所から順次、段状に削平して構築しているが、大きく四部分に分かれる。すなわち、現在、郷前の集落から北へ、丘陵の凹部を貫いて、北浦に向けて道路が走っているが、この道路の最高所付近の西側には平坦な畑地が大きく二段に拡がっている。この部分が主郭であり、東・北・西は一段高く帯状の土塁がコの字状に取り囲んでいる。この主郭の東側は最高所に向かって三段の帯曲輪が取り巻き、頂部の平坦面から東北の大堀切の最上部に向けて三段の平坦地が延びている。これを東郭と呼ぶ。一方、主郭の西部は三段の南北に細長い帯曲輪状の平坦地が設けられていて、最上段は土塁となっている。

次に、郷前集落の最奥部を挟んで東西に、二面の広い平坦地が設けられている。西を西南郭、東を東南郭と呼ぶ。大手、すなわち、城の主要な出入口は大草児童遊園から加藤光治氏の邸宅を結ぶ竹藪の凹地である。この遊園地周辺を「城下」と呼んでいる。

以下、各遺構について述べる。

## 1. 主 郭

主郭は中央の凹部平坦面で、道路を挟んで南北二面に分かれる。これを二面に分ける理由は、中央の東西に走る小路の西方の高い段が、二段とも北側が東に張り出して折れをつくっていることと、東側において現道路から東の高い段へ登る道が設けられていることによる。もっとも、この道は当初からあったものかどうかは判らない。

主郭の北面は北側において幅18m、南側で幅27m、南北の長さ35mの梯形をしている。主郭の南面はいま四段に削平されて畑地となっている。北側の幅30m、南側の幅40m、西側の長さ30m、東側で38mの梯形をしている。この主郭の東端を南北に走る道路はもちろん後世のものであって、江戸時代の絵図面には載っていない。なお、北面平坦地の北側はいま道路が北へ貫いているが、切通しの西側において、幅7m、高さ70～80cmの土塁がめぐっていて、もと北側は土塁によって遮られていたことが、道路東側の崖面の状況から推測できる。

なお、主郭北部の畑地から8世紀代の須恵器片や14世紀代の山茶碗片のほか、15世紀後半の古瀬戸灰釉平碗、16世紀初めの大窯Ⅰ期の天目茶碗、同期の土師器内耳鍋などが採集されている。また、南部の畑地から古瀬戸灰釉陶片（穴窯期のもの）が採集されていて、この主郭が15世紀後半代にはすでに存在していたことが知られる。

## 2. 東 郭

東郭は大草城の東部最高所の平坦面を中心に、その周囲を三段の帯曲輪がめぐっている。最高部の平坦面は東西の幅21m、南北の長さ35mの不正矩形をしている。その北側に東北方に向けて一段低く、幅13m、長さ24mの細長い平坦面が北々東に向けて延びている。この二段の最上部平坦面の周囲を三段の帯曲輪がめぐっている。この帯曲輪は中央付近で段をなして、北側に一段低くなっており、攻撃と防禦の両面を考慮したものと思われる。帯曲輪西側最下段は主郭の東側土塁となっている。

東郭の最高所から一段東に降った平坦面から、16世紀代の灰釉天目茶碗の破片が採集されている。この平坦面から一段東に降った帯曲輪の西南端に、直径1mほどの井戸がある。さらに一段東に降った半円形の平坦面の南端に、一辺1.5mの方形の井戸があって、これらの平坦面が当時存在し、生活に利用されていたことが知られる。

また、この帯曲輪の東南へかなり降った永見寺の墓地の北側の、大堀切との間に段状に五面の小さい平坦面がある。いま畑地となっているが、最上段のもっとも広い畑から志野の陶片や、17世紀代の御深井灰釉陶片などが採集されていて、16～17世紀代にすでにこれ



らの平坦地が造られていたことが知られる。

この平坦地がいかなる機能を有するものであったか、明らかではない。大堀切に面したこのような陰の部分に位置することは、東からの攻撃に対する防禦のための小曲輪とも考えうるが、この部分から採集されている陶片が志野を上限とし、江戸時代を通じてみられることは、廃城後、居住区として使用されていた可能性がある。

なお、この西側の高い斜面と、熊野社を取りまく道と社殿との間に幅5mばかりの堅堀がみられる。後者は南の熊野社に登る石段の東にみられる堅堀に続いていたものと思われる。また、東郭の北側は急斜面になっていて、下の二段の畑地は戦時中の開墾であるという。

### 3. 主郭西部の土塁と帯曲輪

はじめにも触れたように、主郭の西側に三段の、南北に細長い平坦面がみられるが、その最高所は標高98.5mで、主郭東側の一段目の平坦面と同じ高さである。この最高所の平坦面は幅8m、長さ52mの細長いもので、単独の曲輪として機能したとは考えられない。防禦のための土塁とみるべきであろう。この土塁の東側は主郭との間に二段の南北に細長い平坦面があり、東郭と同様に主郭を取り囲む帯曲輪的なものと考えられるが、西側では高い段差があって、下段の平坦面が幅8mほどで北から西へこの最高所を取りまいている。なお、土塁西側の平坦面は長さ40mあまりで、土塁の三分の二くらいのところから南へ深く落ちている。この平坦面のさらに西側には幅10mあまりの平坦面が二段設けられているが、その南側も急傾斜をなして、上段の南辺と一直線に並んでいる。この傾斜面の下を西方山麓の墓地の北側から道が通じていて、土塁の南下の曲輪に通じている。この曲輪は土塁の南端を取り囲むように鋸形になっていて、東西23m、南北は西側の長い部分で30m、東側の狭い部分で13mあって、かなり広い面積を有する。この曲輪の東北端は主郭南部の西南端に接続している。その南側は大手曲輪に面して3.5mあまりの高い崖となっている。また、この曲輪の西側に、城道の南の谷を挟んで小曲輪が二段設けられている。

### 4. 虎口の構造

大草城の大手虎口は前項で述べた土塁の南に、西方に面して設けられている。土塁南曲輪の南辺から一段降って幅5m、長さ20mの平坦面があり、南と東側は3mばかりの崖となっている。この最も長い平坦面は、西端において2mほど北へ屈折させて幅6mの土塁が西方へ延びている。すなわち、大手に面して横矢がかりの折れを設けているのである。

この崖下には幅10mの広い通路が西から東へ緩やかな傾斜で登っていて、主郭南面下の広い平坦面に通じる。

また、この通路の南側には高い土塁が設けられている。土塁は幅8m、長さ30mの整美なもので、道路面まで3.5mの高さがある。この土塁は仔細にみると、一番高い部分の長さは20mで、西側は約1mの段差をもって低くなっている。この通路の西端はいま戸田崇彦氏の牛舎と倉庫によって削られていて、虎口の状況は明確ではない。

## 5. 西南郭

大手虎口南側の土塁の南に広い平坦面がある。一種の出曲輪ともいうべきものであろう。この曲輪面は土塁の最高所から3mあまり低い。この曲輪を西南郭と呼ぶ。この西南郭はいま東西の幅45m、南北の長さ35mの、やや南に狭い逆梯形をなしている。この平坦面の西南端に、南北に長く、幅12m、長さ25m、長さ1.5mのやや幅広い土塁がある。そして北の土塁との間20mばかりは抜けている。西側は土塁線と一直線になっていて、4mの落差をもって急斜面をなしている。東側は2.5mの落差をもって民家の敷地になっている。戸田崇彦氏によると、この曲輪の西北部はもと西南土塁が西縁に沿って延びていて北側の土塁に続いてたという。この曲輪の平坦面の北縁は1.5mばかり高くなって幅4mほどの東西に長い平坦面がみられる。北側土塁との落差は1.5mある。この細長い平坦面は西南土塁の高さとほぼ等しく、削平以前は幅4m、高さ1.5mの土塁がこの曲輪の北側から西側にかけてめぐっていたことになる。そしてこの土塁の西側には一段低く帯曲輪がみられたという。この曲輪の東北端は土塁が切れていて、幅5mの通路が北へ延びている。この通路面は大手虎口の通路面より一段低く、加藤氏の宅地の南辺の崖下を通っている。現在、幅50～60cmばかりしかないが、鈴木鉦教・戸田春男・中野十四夫氏の御教示によると、もと3mばかりあって、東へ延び、東南郭へ続いていたということである。

## 6. 東南郭

永見寺の西を通って熊野社に行く道路は、かなりの勾配をもって北へ登っているが、その西側は一段高く、広い平坦面があって、畑となり、北縁に社務所が建っている。東南部分は南へ張り出して、鍵の手状になっている。社殿前の広場と4.5mの落差をもって、この曲輪からは、まだ江戸時代の陶片しか採集されていないが、当初からの曲輪であった可能性が高い。

さて、熊野社へ登る石段の東側は高く盛り上っていて、幅5mの土塁が南に傾斜しながら

ら約20mばかり永見寺の裏に向かって延びている。その東に接して幅5mほどの豎堀がみられる。この豎堀は熊野社の社殿東側でみられた豎堀に続くものと思われる。

## 7. その他の遺構

以上が大草城の主要部分であるが、この四郭を取りまく山麓斜面のうち、北側では溝之杖池に向かって数段の平坦面が東西に長く広がっている。これらの平坦面からは8世紀代の須恵器から江戸時代までの陶片が多数採集されており、大草城の付属部分として利用されていたことは明らかである。中野十四夫氏の御教示によると、溝之杖池から東南に延びる凹地は「ワナツボ」あるいは「泥田」と呼ばれており、かつては深い湿地で、池に続いていたということである。いま埋められて水田となっていて、もとの姿を推すべくもないが、かなり幅の広い堀が設けられていたものと思われる。城域の北限を劃するものであろう。したがって、主郭からこの堀までのかなり広い斜面は、城に関連する地域（総構か）として利用されていたものと考えられる。また、大草城西側の、県道瀬戸・大府・東海線の走る水田地帯はかつては深い湿地帯であって、自然の防禦線を形成していたものと考えられる。江戸時代の絵図面をみると、現在の県道はなく、大草城の麓に沿って走っていたことが知られる。城の南側は現在、郷前の集落となっているが、その南縁は一段低くなって水田となっている。この大草城の東南郭と西南郭に挟まれた斜面も居住域として取りこまれていたものと考えられる。

## 第3章 結語

### 第1節 遺構からみた大草城

前章でみたように、大草城は低丘末端頂部の凹地を削平して長方形の平坦部をつくり、西・北・東の三方を土塁と帯曲輪で囲んだ主郭を中心に、周囲に複数の曲輪を配置した平山城である。この城に関する最も古い文献である『尾張志』（天保年間）に、「西北二方は山を垣とし、東南は二方ともに深谷を境とす。右城内東西二十間、南北二十間あり、城主は福岡新助也と土人いへり」とあり、それ以後の文献は大きさの数値に若干の違いがあるのみで、殆ど尾張志に依っている。この数値は城域の現状からみて大きくくいちがっている。また、城主福岡新助についても何時代の人物であるか、まったく不明である。このような低丘上に城を築く平山城は尾張・三河地方に数多くみられるが、いずれも室町時代に入ってからのものであり、そのほとんどが室町中期以降、とくに戦国時代に入ってからのものである。この大草城はさきにも述べたように、主郭西南部から15世紀後半の穴窯末期の古瀬戸陶片が採集されていて、そのころまで遡り得ることが知られるが、上限は不明である。

いま、大草城を取りまく周囲の状況を見ると、中央の諸郭を中心に、「ワナツボ」を北限として、西方山麓から郷前集落を含み、東南の杵之洞の谷、永見寺東部の大堀切で囲まれた広大な範囲は、城郭と家臣団の屋敷地を含んだ総構の様相をもつものと考えられる。このことと関連して注意を引くことは、主郭と西南郭を区切る大手城道の巨大さと土塁の整美さ、折れを多く設けた防禦機能をたかめた構造は、永禄・天正期に多くみられるとの指摘があることから、大草城は戦国末期にかなり手が加わっていることが考えられるのである。おそらく初期の大手城道は、墓地の北から主郭西南の曲輪に入るのが本来の姿であったのではなかろうか。主郭はおそらく城主の居館であり、東郭が詰の城として機能したものと考えられる。このようにみると、西南郭や東南郭が築城当初からの姿であったかどうかは判らない。

### 第2節 歴史的にみた大草城

前節でみたように、大草城は福岡新助の築城であるという。それが何時であったか不明であるが、ここで考慮されるのは大草城から東南600mの、香流川左岸に位置する前熊寺の境内一帯が福岡太郎右衛門の居館であったという伝承である。この福岡館と同様な立地を示す岩作東城が南北朝代の築城と考えられることから、大草城築城以前には福岡館が居

館城であった可能性がある。このような、川を一方の防禦線として築かれた方形プランの平城は濃美平野に数多くみられる<sup>註2</sup>。おそらく福岡館から大草城へ移ったものであろう。その後の経緯についてはまったく不明である。しかし、大草城は永禄・天正期まで存続しているのである。それを示す史料として前熊寺文書がある（文献資料21・22・23）。それらの文書によると、この地域は永禄6年(1563)岩崎城（愛知郡日進町岩崎）の城主丹羽和泉守の領地となっており、さらに天正7年(1579)には森武藏守長可の領地に移っていることが知られる。永禄から天正にかけて福岡・丹羽・森と領主の移動がみられるのである。前熊寺文書は寺域の租税除地を記したものであって、大草城については触れていないが、大草城が大きく改修されるのはおそらく森長可の時期であろう。というのは前熊寺の除地がその後、寛永元年の伊奈備前守まで絶えているところから、長久手合戦における森長可の戦死した天正12年以後廃城になったと考えられるからである。

以上のように考えると、天正12年4月9日の小牧・長久手合戦と大草城との関係を考慮せざるをえない。すでに、第1章第2節4項において詳しく触れられているが、当時の情勢からみて、森長可は天正7年以降、自分の領地であった地域の一角に、重要な地歩を占めるこの大草城を整備し、戦闘に備えていたことは十分考えられるところである。長久手合戦に関する数多くの記録類からこの大草城が完全に抹消されていることは第1章でも述べられている通りである。

しかし、その関係を類推する資料に天正13年(1585)の大草庵創建棟札（永見寺蔵）がある。その裏書にみられる願主のうち、伊藤三右衛門友信・鈴木武兵衛通宣・中野傳之丞が豊臣方・池田軍の侍大将であったことである。彼等が長久手合戦の主戦場に近いこの大草に落ちのび、そこに安住の地を得たことは、この地域が豊臣方・森の支配地であって、彼等がかくまう素地をもっていたことを示しているのではないだろうか。

近世の記録類からこの大草城が抹消されたことは第1章の推論の通りである。

註1. 千田嘉博氏の御教示に依る。

註2. 河川を一方の防禦線として取り込んだ平城として、巨大なものでは尾張の守護所の置かれた下津城や清須城があり、小さいものでは天白川の上流域を利用した丹羽氏の本郷城や藤島城などがある。丹羽氏は天文年間に本郷城から平山城の岩崎城に移っている。